

寄稿

物価の高騰とお金の値打ちの関係について考える

上金 忠夫 (中43回)



現在は一ツ橋大学と名前を変えましたが、^{くにたち}国立にある東京商科大学商学専門部を卒業したのが、昭和14年3月、日本郵船での初任給が65円。旧制の専門学校ですが、私立大学並みの扱いでした。現在の平成20年を昭和に直すと昭和83年に当たりますので、それから14年を差し引きますと69年を経過したことになります。

そして現在の大卒の初任給は20万円位。その20万円を65円で割ってみて下さい。何と69年間に3,077倍になっています。

物価とお金の値打ちの関係は、裏腹の関係にあるという前提は間違ってますでしょうか。お金の値打ちは3,077分の1に下落していることになります。

いくら欲のない人でも、70年近くの歳月を経ているとはいえ、自分の財産が何時の間にか3,000分の1以下になっていると言われたら、心穏やかではないと思います。勿論大卒の初任給だって立派な物価の一部です。

勿論、物によって高騰の率は違います。一番値上がりしているのは地価でしょうね。

そして、一番お金の値打ち、物価の変動

が激しかったのは、昭和20年8月15日、日本敗戦の時期でした。

私も2回赤紙が来ましたが、私も戦争中ボーナスの中に愛国債がまざっており、戦後は紙っぺらになってしまいました。名前が愛国債で、戦争中は売りに出ると非愛国者扱いされますから、一番確かな筈の国債が、紙っぺらになってしまっても、誰一人文句を言う人はいませんでしたね。

とにかく日本が戦争に負けたショックの方が大きく、諦めるのも早かったんだと思います。

在学中戦争中、中央線水道橋（郷里の学生寮が本郷弓町にあったもので）から国立まで約一時間通学し、国分寺あたりの国電の窓から畠の中に看板が出ていて、昭和10年頃売地として、一坪50銭とありました。ギザ一枚*で一坪が買えたわけです。今どの位しているか、調べようもありませんが、農地でも50-60万円はしていると思いますので、坪50万円としますと、百万倍になります。

地価は場所によって格差が大きいですよ。敗戦といった正に千載一遇というか、特異な大変革を除いて、一般物価は普段は目立たない上昇の仕方をしています。

戦前とは昭和10年を標準にしていると何かの本で読みましたが、そう言えば、その頃は百万長者という言葉がありました。今は若い女性でも百万円位の貯金はどなたでもお持ちで、正に死語になってしまいま

した。

海外に目を向けてみますと、第一次世界大戦で日本と同じ敗戦の憂き目をみたドイツでは、大変なインフレのため、日常、例えば野菜一つ買うにしても、トランク一杯に札を入れて持って歩かねば買い物が出来ない為、ドイツ政府は、すぐさまデノミネーション、1万円を1円とすといった方策をとりました。

日本ではデノミはやりませんでした、銭の位の硬貨が無くなって、円になりました。国民性の違いなのでしょう、日本人はデノミは嫌いのようです。

ところで年限が長いことでは、国民の年

金の問題があります。定年まで約40年という長い期間、保険料というかたちで掛け金をした価値の高い貯蓄です。定年後金の価値が下がってゆく給付を40年続けると100歳になるので、十露盤^{そろばん}は合っていることになっているようで、矢張りそこまで考え計算しておられる部門があるのかなと思ったり、いやそれは考えすぎかなと思ったり、これは高等数学の分野かなと思案しているところです。

*)ふちにぎざぎざのある硬貨。五十銭銀貨をいった。

